

虐待サイバiberの観点からみた、  
現在の児童相談所・社会擁護の課題と  
子ども家庭庁創設の必要性

風間 暁 (Kazama Akatsuki)

2021年3月9日(火)「Children firstのこども行政のあり方勉強会～子ども家庭庁創設に向けて～」講演

## Profile プロフィール



### 風間 暁 (Kazama Akatsuki)

アドボケーター、保護司、  
依存症者予防教育アドバイザー、他

被虐待児として日常的に暴力や折檻を受けて育つ。

実父が飲酒運転で若者の人生を奪ったことをきっかけに保護される。加害者家族として受ける迫害から逃げる形で、母とともに転居。転居先の小学校で出会ったヤンチャなグループと意気投合し、学級崩壊を引き起こす。やがて本格的な非行に走り、母をはじめ、自分を苦しめてきた大人たちへの反抗・復讐のために生きるようになる。

あるとき補導され、更生施設に入所。出所後も上手に生きることが出来ず、自殺未遂を繰り返しながら、違法薬物を使うことで苦しさを麻痺させながら過ごす。

2011年3月、薬物の過剰摂取によりICUに入院。座骨神経麻痺により左下肢機能が全廃し、死ぬことしか考えていなかったところを医療・仲間の力添えがあり、心身ともに奇跡的な回復を遂げる。

現在は発達障害を持つ2児の母となり、薬物依存症の予防教育、非行少年の更生保護、虐待の防止活動に力を注いでいる。

# 主な活動実績

## 2019年

- ▶ 厚生労働省依存症啓発事業 依存症啓発漫画「だらしのない夫じゃなくて依存症でした」薬物依存症者モデル起用
- ▶ 社会的包摂を体現するサードプレイスカフェ「ごちゃまぜCafeメム」オープン
- ▶ NHK「ハートネットTV」発達障害特集「自閉スペクトラム症とバーチャル空間」で「ごちゃまぜCafeメム」紹介

## 2020年

- ▶ 議員VS虐待サイバー討論会「No Abuse Tokyo」登壇（衆議院議員、都議員ら数名と登壇）
- ▶ 俳優 高知東生さん、活動家 田中紀子さん YouTube「たかりこちゃんねる」メインゲスト出演（再生回数2万5千）
- ▶ COVID-19感染拡大で情報収集が困難な方々に向けたアウトリーチ責任者任命（一般社団法人スワローポケット）
- ▶ 厚労省補助金事業「依存症当事者のオンラインミーティングガイドライン」提案・執筆（特定非営利法人ASK）
- ▶ 「世田谷看護学校」にて、医師らと共に依存症当事者として講演
- ▶ 全国から政治家が集った「虐待防止策イベント in 東京」、中野サンプラザにて登壇
- ▶ 回復のプロセスを若者に伝える自叙伝「RECOVERY（仮）」、合同出版より2021年中の出版が決定
- ▶ 依存症専門治療機関「大船榎本クリニック」にて、依存症回復者として講演

## 2021年

- ▶ 「女子SPA!」取材記事「中卒・元ヤンから保護司になった女性の壮絶人生」、Yahoo!ニューストップ掲載
- ▶ 国内トップクラスの精神科医や専門家が審査員を務める、令和2年度「こころのバリアフリー賞」個人受賞
- ▶ 厚労省依存症啓発事業 依存症啓発漫画「母のお酒をやめさせたい」薬物依存症者モデル起用、取材協力

1.

# 虐待サバイバーの観点から見た 児童相談所の問題と、"支援者の支援"

---

「森を見て、木を見ず」な支援体制。目を背けられた木が、腐って朽ちていく。

## 児童相談所の問題と、"支援者の支援"

---

- ◆ 虐待サバイバーとして、児童相談所・一時保護所で支援者達からひどい生活を強いられた経験がある。
- ◆ しかし、大人になって自分が支援者になってみると、現場の支援者の待遇の悪さや、支援者に対するケアがないがしろにされている問題があり、支援する側の心身もギリギリまで追い詰められていることに気づく。
- ◆ ケアされず、追い詰められた状態の支援者によって、保護された先でも、子どもが虐待される"負の連鎖"が起きている。



虐待された子どもは、  
大人の一挙一動に、とても敏感だ。

余裕がない・イライラしている・激昂する・  
不安定になっている支援者を見て、  
相談することができなくなったり、  
支援者から虐待を受けても我慢してしまったり、  
人に心を開けなくなったり……

大人の言動・行動は、子どもに大きな影響を与える

---

## 2.

# 虐待サバイバーの観点から見た 社会擁護の課題

---

親と暮らすことが幸せであるとは限らない。ひとりひとりの事情にあった支援を。



## パーソナライズされたゴール設定の必要性

- ◆ 虐待サバイバーとして、支援の「出口」に「家族の再統合」「実親との再生活が促進」とあることに懸念を抱いている。
- ◆ 虐待された子どもは親に対する信頼を失っている。どのようにケアをするか。
- ◆ 虐待親と共依存関係になれば、子どもはより虐待から抜け出せにくくなる。
- ◆ 親と暮らすことが幸せとは限らない。個々の事情に合わせたゴール設定が必要。

タテワリ行政で  
連携が取れない・  
情報共有されない

ヒト・モノ・カネ  
リソース不足  
専門職の軽視・  
待遇の悪さ

机上の空論・偏見・  
当事者無視の理想論・  
根拠の乏しい根性論・  
家族神話など

<複雑に絡みあう、支援阻害の要因>

当事者個々の事情に  
フィットしていない  
画一的なゴール設定・  
当事者が望んでいない  
支援の押し付け

<現状の問題点>



# 3.

## 虐待サバイバーの観点から見た アドボカシー制度の課題

---

同じ苦しみを経験した人にしか、話せない・聞けないことがある。

虐待された子どもは、"まともな大人"に対してやり場のない怒りを感じることもある

“

「いいね。国家資格をとるような余裕を  
親から与えてもらえて」

「あんたが大学や大学院に行ってる間、  
私は今日を生き延びるだけで精一杯だったのに」

「愛情いっぱい育ててきた人に、私の何がわかるの？」

---

医師、教師、社会福祉士、保護司等 支援者を前に、本音で話すことが難しい当事者は少なくない

## 虐待サバイバーがアドボケーターになるメリット

---

- ◆ 同じ苦しみを経験した人になら、心を開きやすい。
- ◆ 虐待から生き延び、心身の傷を回復し、社会に出て働いている大人がいる、ということ自体が虐待された子どもの希望になる。
- ◆ 回復した虐待サバイバーの雇用を創出できる。
- ◆ アドボケーターの活動が、虐待サバイバーの回復促進につながる。

アドボカシー制度の創設・アドボカシー資格制度の設立の際には、  
有識者会議等の場に、ぜひ虐待サバイバー・当事者を参加させてください

# 4. 子ども家庭庁(仮称)の必要性

---

「家庭」という名付けが持つ、家族神話的ステイグマ

## タテワリ行政による、親権者の負担の問題

---

子どもに関する各種申請・支援の申し込みをする役所の窓口がバラバラなため、何度も役所・保健所・子ども家庭センター・学校・病院等に、平日に仕事を休んで行かなければならない。

また、役所や関連機関の情報共有も進んでおらず、高額な診断書の原本を何枚も要求されたり、どの窓口で何の手続きを、どの順番で行えばいいか役所の担当者も把握していなかったりと、支援開始までの導線が整理されておらず、関係機関をたらい回しにされることで疲弊している親権者が多い。

子どもだけでなく、親権者や家族が障害や病気を抱えていれば助けを求めるコストは何倍にも膨らむ。支援にたどり着くための情報収集・相談・申請プロセスの煩雑さ故に、助けを求めることをあきらめてしまう人も少なくない。支援が必要な人ほど、支援を受けるためのお役所スタンプラリーを乗り越えることができず、支援の網目から抜け落ちてしまっている傾向にある。

子どもに関係する役所への書類提出や、支援の申し込み窓口が一本化されるだけでも、親権者の心理的・体力的・経済的な負担は大きく減る。

「家庭」という名付けが持つ、家族神話的ステイグマ

---

子どもファーストなら、家庭はセカンド

新しい省庁の名称は「子ども庁」に

虐待サバイバーからみて、“子どもファースト”を謳って創設される省庁の名称が「子ども家庭庁（仮称）」とされていることに懸念を感じる。

特定のジェンダー観にもとづく家族像、家父長的価値にもとづく家族像、母性愛神話、“離婚・家族崩壊にまつわるステイグマ”、“血縁・血統重視と里子差別の問題”、“ひとり親・未婚母に対する偏見”など、日本社会に深く根をはる“家族神話的ステイグマ”は数多い。「家庭」という名付けが、子ども個人の命や権利を尊重することの妨げにならないだろうか。



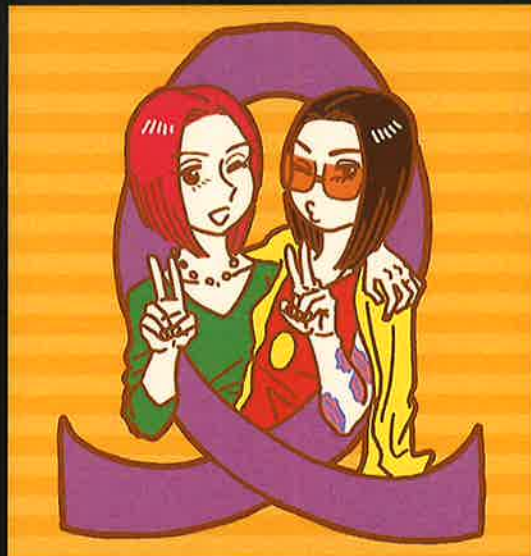


イラスト: 三森みさ

# Thank you!

今日、この場に私が来られたことも、

大きな一歩です。

最後までお聞きいただき、

誠にありがとうございました。

<本日の講演のご意見・ご感想をお寄せください>

- ▶ Twitterアカウント : @k6rm6
- ▶ Googleフォーム <https://forms.gle/ZiyoN3GnQUy8hJPB7>



Googleフォームへ

資料作成協力 : Pulmo